ID 1008394

どこまでも続く夢を描いて 好きだと思えることに挑戦

▲世界児童画展、文部科学大臣賞受賞作品「どこまでもつづく夜空」（美育文化協会 提供）

作新学院　小学部６年
小潟（おがた）　愛実（まなみ）さん
（受賞当時）

プロフィール

小さい頃から絵を描くことが好きだった小潟さん。市内のアトリエ教室に通い、「どこまでもつづく夜空」を制作。
今年３月に、第 50 回世界児童画展で文部科学大臣賞を受賞。
４月から、文星芸術大学附属中学校に通う。

今年３月、受賞作品が発表された、３歳から15歳が対象の世界児童画展。毎年、国内のみならず、40を超える国と地域から応募があります。今回、国内から約４万６000点、海外からは約３万４000点の合計約８万点の応募の中で、小潟さんの作品が、見事、文部科学大臣賞を受賞しました。

小潟さんは「大きい賞をもらったのは初めてなので、とてもうれしい」と、喜びを噛みしめます。

受賞作は、幻想的な星空を描いた「どこまでもつづく夜空」。科学図鑑に載っている星空の写真から着想を得て、制作には約３カ月間もかけた力作です。暗い夜の空に、星が明かりを灯す様子が印象的なこの作品について、小潟さんは「水で薄めながら緑や青を塗り重ねて、トーンを変えることで表現した」と工夫した点を話します。

また、きらきらと輝く星には、黄色やピンクなどのさまざまな色を使い、特に時間をかけて丁寧に描き上げました。絵画を描く時に大切にしていることは「楽しんで描くこと」と、はにかみます。

小潟さんが絵画に興味を持ったのは、小学３年生の頃。友達が描いた桜の絵画を見て「自分もこんなふうに、きれいな色で絵を描きたい」と思ったことがきっかけで、市内のアトリエ教室で美術を習い始めました。

月に２回ほど通うアトリエ教室では、絵画だけでなく紙粘土や段ボールを使った工作なども行います。決まった課題はなく、生徒が描きたい、作ってみたいと思ったものを形にする教室で、先生にアドバイスをもらいながら、自由に創作をすることで、小潟さんの想像力・創作力が培われました。

また、一緒に通っている友達の作品を見て刺激を受け、新たな視点に気づいたり、自らの作品に生かしたりもします。

４月から中学生になった小潟さん。「これからは、美術の授業を頑張りたい。立体的なものを描くことに挑戦したい」と意欲的です。また、部活動については、小学５年生から始めた「茶道部に入りたい」と、顔をほころばせます。さらに、将来の夢は医師になること。今は、好きだと思えるさまざまなことに挑戦しています。

好きなことに精いっぱい取り組み、将来を見据える小潟さんの目は、夜空に浮かぶあまたの星のように、きらきらと輝いています。